



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

# ＜「南アジア／インド班」第6回研究会講演録＞故郷のための寺院、故郷としての寺院：インド移動商人マールワーリーによるヒンドゥー寺院運営

著者	田中 鉄也
雑誌名	関西学院大学先端社会研究所紀要
号	15
ページ	114-130
発行年	2018-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00026912">http://hdl.handle.net/10236/00026912</a>

■ 特集2 2014年度先端社会研究所定期研究会・報告記録 ■

2014年度第1回定期研究会（「南アジア／インド班」第6回研究会講演録）

講 師：田中 鉄也 氏（日本学術振興会海外特別研究員、デリー大学社会学科臨時研究員、国立民族学博物館外来研究員）

題 目：故郷のための寺院、故郷としての寺院

－インド移動商人マールワーリーによるヒンドゥー寺院運営－

日 時：2014年7月4日（金）16:00～18:00

場 所：関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス 先端社会研究所セミナールーム

司 会：鈴木 晋介

○司会 それでは、先端社会研究所本年度第1回の定期研究会を始めさせていただきたいと思います。開会に先立ちまして、当研究所副所長の佐藤先生のほうから御挨拶いただきます。よろしくお願いします。

○佐藤 はじめまして、先端社会研究所の副所長を務めております佐藤哲彦と申します。専門は社会学ですけれども、先端社会研究所の簡単な紹介をさせていただきます。こちらの研究所はかつて関西学院大学社会学部が受けた COE プログラムをステップとして設立された研究所です。

現在では、幾つかの課題設定をして研究を進めていくという形になっており、他者問題というのを特にアジアにおいて考察することをテーマとして、日本班、それから中国国境域の雲南班、そして関根先生をトップとする南アジア／インド班の3つの班体制で、それぞれ課題を設定して取り組んでおります。今年、そして来年という形で研究を進めていき、やがて何らかの形でパブリッシュをして、先端社会研究所らしい研究を組み立てていくことになると思います。今回は今年度の初めての研究会ということで、私自身は中国班に関わっておりますが、実はインド班の話は何度か研究会に出ておもしろいと思っておりますので、期待してまいりました。きょうは、どうぞよろしくお願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

それでは、本日の講師の田中鉄也先生を簡単に御紹介させていただきたいと思います。田中先生は現在日本学術振興会の PD として、国立民族学博物館で外来研究員をされておられます。田中先生は2010年から2012年にかけて、2年間デリー大学に留学なさっておられました。その後、御帰国されて今年の春に、関西大学大学院で博士号を取得なさいました。本日は「故郷のための寺院、故郷としての寺院、インド移動商人マールワーリーによるヒンドゥー寺院運営」というタイトルで御発表いただきます。それでは、田中先生、よろしくお願いいたします。

■ 特集2 2014年度先端社会研究所定期研究会・報告記録 ■

「南アジア／インド班」第6回研究会講演録

故郷のための寺院、故郷としての寺院  
ーインド移動商人マールワーリーによるヒンドゥー寺院運営ー

田中 鉄也

(日本学術振興会海外特別研究員、デリー大学社会学科臨時研究員、  
国立民族学博物館外来研究員)

御紹介にあずかりました田中と申します。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

先ほど鈴木さんがおっしゃった通り、この3月に関西大学文学研究科博士課程後期課程を終了しました。今回の発表はその博士論文の核となる部分に若干追加資料というか、追加調査を足した部分を、先端社会研究所の包摂と排除のテーマにどのような形で寄せることができるかを考えたものになります。私が調査しているのはインド移動商人マールワーリーという人々についてです。彼らはビジネスマンとして特にここ100年ぐらいで名をはせるようになり、自分たちの稼いだお金を各所に消費しているのですが、私が今回紹介するヒンドゥー寺院はそのうちの一例です。この寺院をつくったことによって起きる軋轢、自分たちのコミュニティと、そこに入らない人々との意思疎通がうまくいっていないことによって起きる齟齬というのを最終的なテーマとして持っていければなと思っております。

タイトルは「故郷のための寺院、故郷としての寺院」とさせていただきます。これが意図する意味は、本来あるべき姿である「故郷のための寺院」が、特に1990年代以降の寺院運営を通じて、徐々に寺院がコミュニティにとって「故郷」そのものになり出していると。さらにその結果として起きる祖語というものをいかにまとめることができるか、というものです。

では、進めさせていただきます。発表の構成は、最初にマールワーリーがどういう人々かを説明します。次に寺院の運営がどういう意味かを簡単に説明しまして、今回の調査対象であるラーニー・サティー寺院を紹介します。その概要を説明した後に、100年に及ぶこの寺院の運営史を取り上げ、創設期から現在まで彼らがどのように寺院を運営していったかということを年代順に紹介させていただきます。

さらに「ラーニー・サティー寺院の分祀と全国的展開」に進みます。この部分が、博士論文から足したところで、特に1990年代以降ラーニー・サティー寺院はその土地を離れてどんどん全国展開されます。ここでは、わかりづらい名称で恐縮ですが、「ラーニー・サティー発現地寺院」と「ナーラーヤニー少女神寺院」という二つの分祀例がどのように運営されているのか、ここ20年ぐらいの展開を紹介させていただいて、最後にまとめさせていただきます。

## 発表の位置づけ

ここでは先行研究とあわせて、今回の発表の位置づけを明確にさせていただきたいと思います。ヒンドゥー寺院と王権論のかかわりを、非常に単純化して言いますと、寺院の建立もしくは運営に関しての先行研究というのは、基本的にその主要な担い手が王族であり、その王族がパトロンとなって、王としてみずからの世俗的な支配力を宗教的権威でもって正当化していったという経緯があります。ここに出したアパデュライやダークスは、前近代の形が徐々にイギリス植民地支配において崩れていったことを詳細に描き出しました。

一方、寺院運営の主要な担い手として、18世紀以降から植民地経済に活躍して、金銭的な利益を得た豪商たちが徐々に乗り出して行きます。彼らは王族と競合するように自分たちの寺院を運営していきます。今回、紹介するマールワリーもその一例なのですが、この事例の意義を読み解いていくことによって英領インド期、そして現在のインド社会における寺院運営というものが、どういうものであるかを読み解いていきたいと考えております。

商人による寺院運営についての先行研究もやはり王権論にかなり引っ張られています。というのも王権論というのは若干オールマイティーのような解釈で、例えば、ヘインズは英領インド期の商人による寺院運営を慈善活動の一種、そしてひいては社会的名声のための投資として読み解きます。投資によって社会の支配層としてアピールするというのは、寺院運営をすることによって得られる宗教的功德だけではなく、それによる清廉潔白なパブリックイメージを養成することによって、ビジネスの信頼性をアピールしていくと。ひいては、支配層としてのイメージをつくり出していくというものです。

一方で近年マールワリーによる象徴的消費に関して非常に興味深い研究が日本でなされています。豊山はマールワリーがなぜ、居住地よりも故郷に対して多く投資をするかということを読み解きました。それはなぜかということ、戦略的に故郷であるべき自分たちを見せようと試みたんではないかと。彼女は故郷における大邸宅というものが、なぜ豪奢になっていったのかを、読み解きました。

以上を踏まえた上で、マールワリーにとっての寺院運営をどういうふうに見ていくかを検討していくのですが、その前に今回使う「故郷」の意味を明らかにしておきます。まず1つ目が本人もしくは家族が生まれた場所、出身地、いわゆる従来言われる故郷という意味合いです。そしてもう一つが、こちらがマールワリーにとって、特に最近50年ぐらいのマールワリーにとって非常に重視される意味なんですけれども、コミュニティが始まったとされる場所としての「故郷」です。これは神話の領域で語られるものなんですけど、今回、発現地と表現いたします。この2つの意味が相まった故郷を、説明していきます。

## 移動商人マールワリーとは

まずマールワリーとは誰なのでしょう。これは2012年度版のインド版フォーブスの表紙です。御覧いただいた通り、いわゆる長者番付となっていて、そのうちトップ10の半数、そし

てトップ100の4分の1がマールワリー出身として列挙されています。非常に成功したビジネスコミュニティのうちの1つとして有名で、特にビルラーのように財閥化したもので一般層にも有名になりました。

ただ、彼らの歴史はそれほど古くはなくて、最初にマールワリーが自分たちの歴史をかき出すときによく彼らが使う言葉が、自分たちはラージプターナー諸藩王国（現在のラージャスターン州）の北西部に相当するマールワール地方から派生したからこそマールワリー（マールワール出身の意味）と呼ばれると。そして16世紀中ごろにここからベンガル地方へやってきた商業集団の自称に由来しているといえます。しかし実際に彼らが歴史の表舞台にあらわれるのは19世紀中ごろからになってからです。商業の機会を狙ってカルカッタなど植民地経済の中心地へ移動し始めました。その過程で全国的な広域ネットワークを買われ、イギリス人商人の仲買人として重宝されるようになりました。

20世紀初頭には貿易や金融の利益を近代産業に投資し、産業資本家として成功をおさめる層がでできます。その典型例がビルラーです。こちらのラージャスターン州の地図を見ていただくと、今回の寺院の本部が、先ほど紹介したマールワール地方とはずれた場所にあります。ちょっと見えづらいんですが、ここをシェーカーワティー地方と呼びます。つまりビルラーのようなマールワリーを代表する財閥はこのシェーカーワティー地方から多く進出しており、私が今回紹介する寺院もこの地方の1都市にあります。

ただ「マールワリーは誰なのか」という質問に明確に答えるものではなく、マールワリーというコミュニティのぼんやりとした定義がある程度です。というのも、まずカースト的帰属が確定されていないことがあります。よく言われるのはアグルワール、オースワール、マヘーシュワリーなど、いわゆる伝統的生業を商売とする人々が中心ではあるのですが、必ずしも彼らだけではなく、例えば今いったカーストに帰属していないが穀物商や金貸し業を営む人たちもマールワリーと呼ばれるときがあります。次に重要な点が地域的帰属です。ラージャスターン州出身という地域的な出自と、かつそこから離れて別の地で生活する状況下にいる人々が、マールワリーと呼ばれると。引用ですが「マールワリーとは、ラージャスターンを離れて初めてマールワリーになるのである」。つまり、ラージャスターンに住んでいる商人はマールワリーとは呼ばれず、ラージャスターンから離れてカルカッタやボンベイで商業的に成功をおさめた人々、そして時には商業をしていない人たちをも含めてマールワリーと呼ぶことがあるのです。

## 商人コミュニティにとっての寺院運営

もともと商人コミュニティにとっての寺院運営というものは、彼らの道徳経済、モラルエコノミーとして読み解かれてきました。特に17世紀以降、豪商たちによる結婚式、葬式における大盤振る舞いや豪華な祭礼の実施というものが、ある種の経済的成功の誇示であると同時に宗教的な意味を持っていると。つまり自分たちは宗教的にコミットした存在なんだというヒンドゥー的な浄性を示すものであったと。時にそれは帰属コミュニティや地域社会に対する贈与活動であり、それをすることによって自分たちが社会的な大物であるとみなされるということを意図したモラルエコ

ノミーであったと議論されてきました。彼らの大盤振る舞いには2つのタイプがあり、まず1つ目が宗教的贈与、ダーンと呼ばれるもの、そして2つ目が慈善活動、フィランソロピーです。

慈善活動が入ってきたのが18世紀に特に英領インド期において、ヒンドゥー的な贈与というのが当時のイギリス人行政官にとっては何の意味もないものだ。そうではなくビクトリア朝的な、ヒューマニズム的な社会に役立つ者としての慈善活動をしなさいというお達しがあったといいます。だからといって、伝統的な贈与、ダーンを完全にやめるわけではなく、むしろ1と2を両立させながら、19世紀ごろから植民地政府と在地社会との要望に臨機応変に应运してきたのです。

ちょっと込み入った話になるのですが、伝統的な贈与として寺院運営がある一方で、実際にそれは植民地社会において制度化されてもいます。当時、植民地支配において宗教的な慣行に対して立ち入らない、介入しないという原則があるにもかかわらず、やはり税収、所得税の収入というものを意図した上で、いかに寺院運営を制度化させていくかというのが支配者側のテーマとなっていました。

ここでまず、1863年の「宗教基金法」を紹介します。この法律によって初めて寺院もしくは神への寄附を公共の利益のための信託、すなわちパブリックトラストとしました。1886年になると「所得税法」が改正され、今度は宗教的または慈善的目的に使われた財産由来の所得は非課税になると規定されました。他方で1890年代になると、ではその宗教的、慈善的目的とは一体何なのだということが議論になり、社会のためになること、すなわち公益慈善目的というのが1890年の「慈善基金法」で明確にされ、公益慈善目的から宗教的な教義や信仰が外れたのです。

ここで振り返ってもらいたいのですが、宗教的贈与と慈善的活動というのは、実際に何をしているのかという内容自体は余り変わらないのです。しかしその行為のベースにどのような思想、ヒンドゥー的なものか、世俗的なものかが関係しているだけで、例えば学校を建てるにしてもサンスクリット学校はダメで、西洋近代的な学校であればよいというように、宗教的な贈与と近代的な慈善活動の線引きをどのようにしていくのが当局の問題となっていきます。そこで1920年ようやく「慈善的並びに宗教的信託法」という形で、公益信託契約を介することによって、宗教的な贈与がそのまま公益慈善目的に認められたという経緯がございます。

この法律によって、実際それまでプライベートな寺院の運営者たちは、それぞれパブリックトラストとして活動し始めるようになります。結局、寺院運営者は寄附金の管理、運用から寺院関係者の雇用までを可能とする甚大な権力を信任された存在であると。王権とは異なる形での榮譽を認められるようになります。今回、紹介する寺院は、1920年以降のパブリックトラストの話となっていきます。制度的な話ばかりでつまらなかったと思うんですけども、すみません。ここから、ようやく事例に入りたいと思います。

## 公益法人によるヒンドゥー寺院運営

今回、紹介する寺院の正式名称は Shree Rani Satiji Mandir です。本尊はトリシュール、いわゆる三叉戟で描かれた女神ですが、彼女はもともと中世期に生きた、ナーラーヤニー・デーヴィーという女性といわれています。彼女は当時の慣行で、夫が死んだときに、死後も夫に貞節を尽くすため

に夫の遺体とともに焼かれて死ぬという、サティーと呼ばれる寡婦殉死を行い、女神となったといわれています。特にラージャスターン州ではサティーを行った女性が神格化されると信じられており、彼女はその一例です。西暦1295年に彼女は女神となり、彼女のために寺院が建立され、現在に至るといわれています。

場所を紹介いたします。ラージャスターン州県別地図の北東部にジュンジュヌー県がありまして、この県庁所在地ジュンジュヌー市にラーニー・サティー寺院があります。この寺院は公益法人「ラーニー・サティー寺院トラスト」が運営しています。この法人は1957年カルカッタで登記されました。現在、この寺院の運営母体は7名の受託者と44名の会員で構成されており、すべてバンサル・ゴートラのみです。バンサル・ゴートラは後ほど紹介いたします。

7名の受託者で構成される理事会が寺院運営の中枢で資産の管理を行います。管理維持スタッフとして約100名おり、彼らは現地の管理責任者2名によって寺院維持を行います。このように非常に巨大な寺院です。寺院の祭司は6名おりまして、宿坊が6棟、各100部屋を確保し、収容人数は最大で1,000人強が泊まることができます。今現在、寺院の敷地面積は8万2,000平方メートルとなっており、法人いわく所有土地面積は全部で約21万平方メートルあるそうです。

この5階建て正面玄関「シンハドワール」が寺院のトレードマーク的なものです。この中に入ると本尊のすえられた本殿があります。その周囲は宿坊で覆われています。本殿の奥に見えるのが、法人が主張する、まだ開発されていない彼らの土地です。コンプレックスの中にはこのように中学校も整備されていて、そこには1,000人ほどの生徒がおります。

ちょっと戻りまして、ここで簡単に寺院運営者たちの帰属を説明したいと思います。まず、最初に紹介したようにマールワリーにはアグラワールという主要なカーストがおります。アグラワールは自分たちには18個のゴートラがあるといいます。氏族と呼ばれるものですが、このうちの1つがバンサルです。バンサル・ゴートラに帰属していることが、受託者・会員になるための資格になります。一方で実際にいろいろ話を聞いてみると、バンサル・ゴートラの中でもラーニー・サティーにコミットしているリネージとコミットしていないリネージがあるといいます。もっとも主にコミットしているリネージがジャーラーンです。ジャーラーンは、およそ800年かけてどんどん80のリネージに分派していくんですが、その分派した中でもジャーラーン、トゥルシヤーン、ルイーヤーの3つが特にラーニー・サティー寺院運営の中核を担っております。

ただこの寺院は、運営者はバンサル・ゴートラに帰属するべきだといいつながら、公に開かれた寺院であることは間違いありません。例えば、実際に誰が参拝するのかというと、特によく行くのはアグラワールのバンサル・ゴートラに帰属する家族らなのですが、もちろんそれだけではなくて誰でも入場可能なのです。ジュンジュヌーに住んでいる人々にとって、この寺院は街のシンボルのような存在で、とりわけ人気のある寺院です。しかしバンサル・ゴートラに帰属している人々は、寺院のさまざまな施設の使用、例えば宿坊や公民館などの使用が認められています。

ではジュンジュヌーに住んでいない人々の場合どうなのでしょう。これはほとんどが、バンサル・ゴートラに帰属し、カルカッタやムンバイなどの大都市に居住する人々になります。寺院ではこのような人々がマールワリーと呼ばれています。近年はマールワリーの中でもバンサル・ゴートラに帰属していない者や、アグラワール・カースト以外の人々も、ジュンジュヌー外から多く

巡礼にやってきます。彼らにとって、この寺院はシェーカーワートイー地方の最大の巡礼地の1つとなっているからです。

では彼ら参拝者は何を期待してこの寺院に行くのでしょうか。よくいわれるのは、ここは商人が運営する寺院なので、ビジネスの成功や経済的な恩恵が期待できるというものです。また本尊のラーニー・サティー自身が夫に貞節を尽くし、自分を犠牲にしたほどの究極の貞女であるために、女性の幸せを保証する存在として、良縁や子宝などの恩寵をもたらすといわれています。

また寺院には年に2回、最大の行事であるメーラー（祭礼市）が行われております。ふだんは、法人いわく、多くて1,000人来るほどなのですが、この日には十数万人が来場します。この際の参拝者は大半がバンサル・ゴートラに帰属する、ジュンジュヌー県外に居住する者たちで、家族を伴ってやってきます。

インドの太陰太陽暦の1つでバードラパダ月（8月下旬～9月上旬）の、黒分第15日であるアマヴァスヤーに最大のメーラーが行われます。1980年代までは1週間から10日間ほど行われていたといわれておりますが、現在は規制のため、晦日とその前後2～3日が実施され、大変ににぎわいます。もう一つはマールガシールシャ・クリシュナ・ナーヴミーという祭事があります。太陰太陽暦マールガシールシャ月（11月下旬～12月上旬）の、黒分第9日であるクリシュナ・ナーヴミーに、ラーニー・サティーの聖誕祭が開催されます。

この2つのメーラーで一番目玉の行事はマンガルパートです。これはインド全土で行われる神へのバジャン・キールタンで、特にラーニー・サティーの一生を韻文にした賛歌を参拝者全員で唱和します。このようにマイクを持っている人物が讃歌を主導し、その他の参加者は唱和し、連呼するような形で行われます。マンガルパートを実施するのに大体2時間ぐらいを要し、非常に行事性の高いものになってます。メーラーが行われるときは、夜通しライトアップがなされ、多くの巡礼者でにぎわいます。

## ラーニー・サティー寺院の運営史

ここまでラーニー・サティー寺院の概要を見てきましたが、ここから寺院の運営史に注目したいと思います。ここからは、寺院が実際にどういう目的で建てられ、どのように発展していったかを年次的にみていきます。

こちらが運営史をまとめた年表です。法人の関係者によれば、もともとラーニー・サティー寺院は1つの祠で、大きさでいうと大体2メートル四方ぐらいの若干大き目の祠が、ジャーラーンに帰属するある家族によって管理されていたといわれています。それが巨大寺院に成長したきっかけの1つが、1912年に結成されたラーニー・サティー義援基金です。この義捐基金は、当時カルカッタやボンバイで既に活躍していたジャーラーンやトゥルシヤーンのビジネスマンたちによって寺院建立の信託基金として設立されたものです。その当時この基金には総勢72名が寄附者として名を連ねたといわれています。この中にはもちろん、マールワリーだけではなく、その多くはジュンジュヌー居住者で、またアグラワールだけではなく、他のカーストの有力者もいたといえます。

この義捐基金に参加したマールワリーにとって、経済的な成功を故郷に還元する、もしくは故



郷に錦を飾るという思いで、地域社会のために寺院をつくるのだという発想があったと予想できます。またそれ以外の寄附者の場合、例えばジュンジュヌーに居住する有力者などは、寺院の基金に参加することによって自分たちもヒンドゥー的な浄性にコミットすることによって、社会の大人物としての名誉を見込んだと考えられるでしょう。

しかしながらここには、先行研究では考慮されてこなかった、もう一つの思惑があったと考えられます。それが 1960 年代から顕現していく「リネージの歴史を具現化する」という企てです。自分たちはどこから始まったのかを探る行為、そして「場所」にコミュニティの起源という特別な意味を持たせる上で、寺院がクローズアップされたのです。1917 年に寺院敷地が確保され、1930 年代になると徐々に寺院コンプレックスが完成していきます。1947 年御存じのとおりインドは独立し、1952 年にはラーニー・サティー寺院の敷地内で初めて 1 回目のメーラーが開催されました。

そして 1957 年になるとカルカッタ在住のジャーランやトゥルシヤーンの篤志家 7 名を中心に運営委員会 21 名が組織され、当時の彼らのビジネスの拠点としていた西ベンガル州カルカッタが法人登記の場所になりました。つまり寺院の運営母体となる公益法人が組織されたのです。

ここで寺院運営の性格が、寺院運営におけるマールワリーの立場という意味で、明確に変容したことが分かります。本来、寺院運営とは地域社会にコミットした人物たちが入るべきだったのが、1952 年には、もはや地域社会を飛び出してカルカッタ在住の人々が担うことになったのです。

その変遷を顕著にあらわすのが、次のジョーシー家との対立です。行ったり来たりですみませんが、改めて年表に戻ります。この事例はなかなか興味深い事件で、というのも、もともとあった女神の祠の管理権に端を発した対立だからです。先ほどの祠はもともと 2 メートル四方のもので、ジャーランのある家族によって管理されていたと紹介しましたが、実質的に女神へのセーワー、つまり奉仕をしてきたのは彼らの伝統的な家庭祭司であったあるバラモン司祭、ジョーシー家でした。1952 年にカルカッタで公益法人が設立された後、1958 年ラムダリー・ジョーシーは自分たちの家が伝統的に祠を管理してきたと主張したのです。

こちらの写真を見てください。この一番中央にいるのが元ジャイブル藩王といわれています。1960 年代初頭に藩王がラーニー・サティー寺院に表敬訪問した際の写真で、彼の周囲に寺院運営者たち、すなわち法人の中心人物たちが取り巻いております。次にこちらの写真にラムダリー・ジョーシーが映っております。ラムダリーは結局、藩王の表敬訪問には参加できませんでした。これはなぜかという、その当時、寺院運営者である法人と、伝統的に奉仕をしてきたというジョーシー家との間でいさかいが起きたためです。このいさかいは、端的に言えば、女神へのお布施は誰のものかというものです。当時の司祭だったラムダリーは、女神へのお布施は奉仕するジョーシー家のものだと主張する一方で、運営法人は、いやいや、それは違うだろうと。女神へのお布施も、寺院への寄付金も、すべて寺院の運営母体である法人が管理しなければならないと反論したため、もめておりました。

このいさかいは徐々に本格化し、最終的にカルカッタ高裁へ行き着きました。1962 年カルカッタ高裁が、収益の権利を分離しなさいと判決を下しました。つまり、女神への儀礼をおこなった後のお布施は、それを実施した司祭ラムダリーに所有権があると。一方そうではなくて、例えば寺院の建築物のため、寺院を発展させるために使ってくださいと指定された寄付金は、公益法人が

管理すべきだと判断されたのです。

しかしカルカット高裁の判決の後、ジョーシー家と法人側の仲たがいは決定的になり、最終的にジョーシー家は追い出されました。法人は、別の人を新しい司祭として雇入れ、1963年にラームダーリーは解雇されました。ジョーシー家は完全に寺院運営から追放されたのです。

ジョーシー家は現在6代目まで続いています。私は6代目の当主へいろいろ聞き取りをするうちに、ラーニー・サティーをめぐる時間軸が、法人とジョーシー家との間で2〜300年ほどずれていることに気が付きました。先のラームダーリーは4代目で、現在の当主のおじいさんにあたります。ジョーシー家はラームダーリーのひいおじいさん、つまりジャガンラームから始まったと。ジョーシー家曰く、初代ジャガンラームこそが、当時のジャーラーン家の当主から女神ラーニー・サティーへの奉仕を頼まれたと。しかも、初代ジャガンラームはラーニー・サティーが寡婦殉死をした際に帯同もしていたと。もはや歴史なのか、神話なのかわからないような領域なのですが。従ってジョーシー家の主張によれば、ラーニー・サティーという女神が登場したのは、せいぜいここ300年ぐらいの出来事であったと逆算できます。この点を法人側に聞くと、当然ながら完全に否定します。それは全くの嘘っぱちで、寡婦殉死が行われたのは1295年で、800年もの古い歴史がこの寺院にあるんだよ。そしてもはやジョーシー家は、法人側にとっては存在しなかった人々として扱われているのです。

このようにジョーシー家の追放によって、マールワリーが寺院の運営権を完全に掌握できました。すなわちこの事件は、マールワリーによる運営方針が確立されたことを象徴的に表しています。マールワリーの運営方針が興味深いのは、自分たちのビジネスの拠点であるカルカットに本部を置いて、その遠隔、1,600キロも離れた場所から、寺院を運営するというスタイルをとっている点です。

## 寺院運営における族譜の重要性

先ほどジョーシー家がラーニー・サティーの寡婦殉死をいまから300年前ぐらいの出来事といっているにもかかわらず、運営法人はそうではないと反論しているといいました。彼らが反論の際にその「証拠」として提示したのがこの書籍です。これは『シュリー・スーラジマル・ジャーラーン』というもので、1964年に発行されたものです。ここにジャーラーン家を中心に、いかにコミュニティが出発し、いかにそれが発展してきたのが記されています。このようなコミュニティの歴史が記された書物を、我々は族譜と呼んでいます。

この族譜はスーラジマル・ジャーラーンという人物の栄誉を記念して、その息子モーハンラールによって1964年出版されたものです。スーラジマルとは1881年生まれで、1938年に亡くなったマールワリー企業家です。第1次世界大戦直前にジュート産業に成功し、1907年にはマールワリーとしては初めて海外との貿易を開始しました。カルカットのマールワリー社会で際だった財力を誇った人物といわれています。

もちろんこの族譜には、スーラジマルが帰属したジャーラーンというリネージの歴史も含まれています。スーラジマルを中心にジャーラーンの家系図がまとめられており、始祖、すなわちリネー

ジの最初の人物は誰なのか、クル・デーヴィー、つまり家の女神は誰でどのようにして女神となったのか、などが詳細に記されてます。

時間も限られておりますので、いくつかスキップして、19 世紀後半から 20 世紀初頭になぜ族譜がもっとも多く登場したのかについて端的に述べさせていただきます。それはいわゆる「カースト」を中心としたイギリス植民地政策への在地社会の応答というものです。1870 年代以降、全インド的に国勢調査が進められ、このセンサスにおいて在地社会の人々がいかなるカーストに帰属し、そのカーストはいかなるものかが詳細に調査されました。特に最も決定的だったのがカースト・ランキングというものを植民地当局が欲しがった点にあります。このランキングの中でいかに優れた位置に据えられるかをめぐって、自分たちのカーストやリネージがその起源から非常に卓越した存在であるということを証明するために、族譜がどんどん編纂されていったのです。今回取り上げたジャーランの族譜は、コミュニティが結集していく上で、ラーニー・サティー寺院というものがコミュニティの象徴的な拠点になりえると位置づけられたことが肝だと。

では族譜に描かれたこの寺院の位置づけだけ、ざっくりと説明させていただきます。ここでの興味深い点は、ラーニー・サティーという女神がいかに誕生したのかという起源譚と、ジャーランがどのように始まったのかという発現伝承が、互いに相関していることにあります。皆さんにお配りした A4 の配布物はその要約です。ジャーラン家の始祖はジャーリーラームという人物です。ジャーリーラームは自分の息子の妻として、ナーラーヤニー・デーヴィーを見染めました。彼女は宗教的にもすぐれた能力を持ち、出自もよかったからだ。当時ジャーリーラームはヒサル地方の宰相の地位にいたのですが、ヒサル太守との間で諍いが生じ、彼は息子とともにジュンジュヌーへ脱出しました。しかしナーラーヤニー・デーヴィーとの結婚を進める上で、息子に一旦ヒサルへ戻るよう命じ、ヒサルへ戻った息子は待ち伏せしていた太守の軍勢に殺されてしまった。夫となる男性の死を目の当たりにしたナーラーヤニー・デーヴィーは、神的な加護を得て、まるで戦の女神のように敵の兵士たちを皆殺しにし、すべてが終わった後、彼女は寡婦殉死をしたと。寡婦殉死の後に彼女は、女神ラーニー・サティーとして顕現します。彼女の寺院を建てれば、家の女神として彼の家を守護するとの信託を聞いて、ジャーリーラームは、ジュンジュヌーに祠を建立します。それ以来、彼の子供たちはジャーランと呼ばれるようになったと。

このように彼らの族譜には、その始祖がジャーリーラームであり、その息子の妻であるナーラーヤニー・デーヴィーがいかに家の女神となったのか、いかにジュンジュヌーがコミュニティの発現地となったのか、女神の起源譚とともにリネージの発現伝承としてもすべて、うまくまとまった形でまとめられています。

それから族譜は、始祖ジャーリーラームから始まり、徐々に 2 代目、3 代目の話へと続いていきます。7 代目トゥルシーラームになると、ジュンジュヌーで大きな戦争が起き、彼らはそこから離散していったと。そしてラージャスターン州のファタープルなどの街へ分かれます。7 代目トゥルシーラームからジャーランの分派であるトゥルシヤーンが始まり、ファタープルへ移動した人々のなかからルイーヤーという家系ができた。

このように彼らは、発現地であるジュンジュヌーから、戦争などのために離散し、他の街へ移動しました。すると移住先の人々から、今度はジュンジュヌーから来た人々だという意味で「ジュン

ジュヌーワラー」と呼ばれるようになります。1950年代以降の寺院運営者たち、すなわち法人関係者は、まさにこの「ジュンジュヌーワラー」たちなのです。彼らの興味深いところは、ジュンジュヌーから離散したのちに代も移り変わったが故に、もはや別の街で生まれ育った人々であることです。それゆえ実際にはジュンジュヌー出身者ではないにも関わらず「ジュンジュヌーワラー」と呼ばれている。これは実際の出身地ではなく、コミュニティの発現地を背負った呼称である。このようなジュンジュヌー出身者でない人たちが、寺院運営に参入し、族譜を編さんしていくことによって、「コミュニティの故郷」として寺院が創造されていきます。

まだ1960年代までしか来ていないのですが、ここで一旦この寺院の運営史の分析を終えたいと思います。それ以降の流れを軽くふれておくと、1970年代に巨大な寺院複合施設がひとまず完成し、この地域の一大巡礼地として成長します。1980年代になると寺院運営に大きな転換期を迎えます。1987年にラージャスターン州内で実際に寡婦殉死が起き、新たな法律が制定されたのです。それは寡婦殉死という行為だけではなく、寡婦殉死をした女性たちを追悼または崇める行為をも禁止する法律で、当然ながらラーニー・サティー寺院は規制の対象になりました。これ以降、この寺院が法廷闘争に入っていきます。このような寺院をめぐる法廷闘争を分析していくと、それだけで別の発表になってしまいますので、今回はすみませんが割愛させていただきます。

## 分祀される寺院、拡散される女神

さて、ここからは分祀されていくラーニー・サティー寺院の展開を検討したいと思います。というのも、マールワリーは、全国各所でいろんなビジネスチャンスを狙って拡散するのですが、行った先々で、今度は、自分たちの女神をまつる祠や、規模が大きいときには寺院を作っていくという傾向があります。

法人いわく、インド内外には推定500ものラーニー・サティー寺院があるといいます。しかしこれは言い過ぎだと思います。私が確認した限りでは両手で数えるほどでした。今後きちんと確認してみたいと思いますが、今回紹介するのはそのうちハリヤーナー州の2つの寺院、デーヴァサル村とドーカー・ハリヤー村の寺院です。

これら全国的に拡散された分祀寺院というのは、カルカッタにある公益法人とは一切関係がなく、それぞれ独立した運営母体を持っているところに特徴があります。今回紹介する2つの寺院は、例えばコルカタやムンバイなどのようにマールワリーが商売をするために移住した場所につくられたものではありません。ラーニー・サティーという女神にまつわる特別な場所に、新たに寺院がつくられたことによって、1980年代からこの女神の巡礼サーキットに組み込まれ、巡礼地として流行るようになったものです。

私が確認する限りにおいて、この女神が分祀された最古の例はこの写真の寺院です。これはカルカッタにある分祀寺院の1つですが、1844年にカルカッタへ移住したマールワリーによってこの分祀寺院が建てられました。これは紹介に留めておきます。

さて今回の2例は、両方ともハリヤーナー州にあります。そのうち1つ目は Shree Rani Satiji Mul Sthan Mandir です。これはナーラーヤニー・デーヴィーが寡婦殉死を行った、まさにその場所

に建立したといひます。だからこそ「ラーニー・サティー発現地寺院」と名付けられました。2つ目は Ladobhai Narayani Mandir です。この寺院は、ナーラーヤニー・デーヴィーの生誕地、つまり彼女が誕生して14歳まで暮らしたとされる場所に建立されました。このように女神に縁が深い場所にそれぞれつくられたが故に、巡礼サーキットの中に入ったというものです。

場所を確認しておきましょう。これらは、それぞれラージャスターン州の北側にあるハリヤーナー州ピワニー県内の、1つ目はデーヴァサル村、もう1つはドーカー・ハリヤー村にあります。それぞれ距離的には100キロも離れていない場所です。1日あれば十分各所を巡礼できます。

## 分祀された寺院がもたらす対立

まずデーヴァサル村の寺院ですが、これは何が興味深いかというと、もともとここに別の女神寺院がすでに建立されていたという点です。それは Devasar Dham、すなわち「デーヴァサル神領」という寺院で、主神にドゥルガー女神を据え運営されてきました。このもともとあった寺院は、運営組織が法人化したのは1996年ですが、村人たちによれば800年前からずっと寺院は守られてきたと。しかし1986年に「ラーニー・サティー発現地寺院」がこの寺院の敷地内に併設されることになります。あとからできた発現地寺院もまた2005年に運営組織を法人化し、結果としてデーヴァサル神領の敷地内に、それぞれ異なる、独立した運営組織をもった寺院が共存するという現状に至ったと。これがデーヴァサル神領の写真です。最初の正面玄関から、階段を上がっていくと、本尊であるドゥルガー女神です。この女神は、村人にはバガワティ女神と呼ばれ、本殿は山の中の修行場に模してあります。

デーヴァサル村にもともとあった寺院にとって、大きな転換点は、1995年にこの村の出身者でローシャンラールというビジネスマンが多額の寄附金をしたことです。それで寺院の大規模改修が開始されました。1996年には、これだけの多額の寄附金を適切に管理するために、「デーヴァサル慈善団体」が設立され、寺院の運営組織として公益法人化しました。そして2002年には現在のような形で、近代的な寺院建築物が完成しました。

時間の都合上かなり割愛して紹介しているので、分かりにくいと思いますが、すみません。デーヴァサル神領は、もともとハリヤーナー州の税務当局によって管理されてきました。厳密には税務当局が、デーヴァサル村の有力者や政治家を選定し、運営理事会を結成してきたのです。その人選は、この村の出身者や関係が深い人を対象としており、いわば地域社会に密着した、昔ながらの寺院運営を維持してきたのです。

一方で新たに参入してきた、ラーニー・サティー発現地寺院はどうでしょうか。この写真は現在の女神の本殿として扱われている祠です。そして次の写真は、それに隣接して新たに建造中の大きな本殿です。まずこの祠を見てもらうとわかると思いますが、デーヴァサル神領の敷地内に分祀されたラーニー・サティー女神は、もともとからある（ドゥルガー）女神をサポートする、従属的な神として据えられたものです。

しかしそれが徐々に寄付金が集まってくることによって、従属神ではなく、完全に独立した主神として据え置こうという意図が働きます。そして寺院もかつての祠から独立した建物へと発展しま

す。この写真が、2005年にできた独立したトラストが現在、建造中の本殿です。これは宿坊を兼ね備えた大きな建造物で、この3階が本殿になる予定だと。このように、それまでは小規模に行われていたラーニー・サティー女神の儀礼が、会場が大きくなると参加する人数もどんどん増えます。現在ではこのようにマールワリーがやってきて大規模な祭礼を実施します。新たな本殿は、おそらく来年にはほぼ完成するそうです。

では、ラーニー・サティー女神が分祀された経緯はどのようなものだったのでしょうか。まず1986年、これは石碑に名前しか残っておらず、すでに亡くなられたそうで連絡がとれなかったのですが、ルイーヤー女史という女性がデーヴァサル村に女神を分祀したそうです。この場所は、まえに述べた起源譚に登場したもので、いわゆる戦争が起きた場所です。つまりナーラーヤニー・デーヴィーが寡婦殉死をした場所なのです。ルイーヤー女史は、この村を探し当て、ラーニー・サティー女神の祠をつくったのです。

そして1988年になると、今度はカルカッタで木材会社を営んでいるシャーム・スングル・トゥルシヤーンという人物がこの寺院を「発見」します。彼へ聞き取りをした際には、まるで何かしら神的なものに呼び寄せられるように、この村を「発見」したというのです。当時、彼はジュンジュヌーのラーニー・サティー寺院に行くつもりでデリーからタクシーを走らせていたと。しかしどうやら道を間違ったことに気づいて、ラーニー・サティー寺院はどこだどこだと通りすぎる人たちに聞いて回ったと。そしてルイーヤー女史がつくった祠にたどり着いたと。祠に感嘆した彼は、彼女に電話し、この祠を何とか寺院にまで発展することができないかと相談したそうです。ルイーヤー女史は、彼にすべてを任せると賛成してくれたと。そこで彼は自分の父親を公益法人の理事長に据えて、2005年「ナーラーヤニー・タンダダース・デーヴァサル・トラスト」を設立します。この団体はトゥルシヤーンの拠点コルカタに法人登記されたものです。受託者数は現在7名で、もちろんのことながらバンサル・ゴートラのみがそれに入ることができます。

この2005年の出来事は、もともとあった寺院（デーヴァサル神領）にとっても、大きな転換期となりました。当然です。敷地を同じにしながら全く異なる運営組織をもつ寺院が登場したのです。ここで一番何が大きかったかというと、寄附金を完全に分離したということです。

両運営組織間での紛争というものがそこから徐々に顕著になっていきました。とりわけラーニー・サティー発現地寺院が経済的に成功を収めていることが対立に拍車をかけました。もちろんジュンジュヌーにある寺院の恩恵があつてこそなんですけれども、ラーニー・サティーの巡礼地としてマールワリーに有名になればなるほど、カルカッタからどんどん多くの巡礼者が訪れ、多額の寄付金を収めていく。その成功によって、発現地寺院は、デーヴァサル神領からますます独立していく。先ほど紹介したように新たに巨大な本殿がつくられ、宿坊がつくられていく。そして、本来は自分たちの敷地内にいさせてあげている立場の彼らがなぜこんなふうに進展していくんだと。デーヴァサル神領の運営者側たちの間で反発が出てきたのです。

彼らの反発をまとめると3点です。まず、マールワリーの巡礼客と、デーヴァサル村に住む一般の参拝者たちに対する態度、待遇が違いすぎる点。宿坊はバンサル・ゴートラしか使えず、祭礼も彼らしか参加できないことが、問題視されました。2つ目は同じ敷地内にありながら、寄附金収入を完全に分離したことに対する反発。本来デーヴァサル村の収入になるはずが、「経済的に搾

取されている」だとか「金に汚いマールワーリーがだましたのだ」などのような意見が聞き取りで頻出しました。3番目は寺院の運営組織を同族に限定している点。受託者はバンサル・ゴートラシかなれないということが、同族への依怙最賈だと批判されたのです。要は、デーヴァサル村という地域社会に対して、ラーニー・サティー発現地寺院が全然貢献していない。または無関心すぎるという態度を、もともとあった寺院側が非常に苦々しく思っていることです。

## 分祀された寺院と村人との不安定な関係

さて次の事例に参ります。2つ目の分祀例は Ladhobhai Narayani Mandir です。Ladhobhai というのはかわいい子とか、愛らしい子という意味のヒンディー語ですが、ここではその意味で「ナーラーヤニー少女神寺院」と訳しておきます。これは、先ほどのデーヴァサル村から 20 キロ程度、離れた場所で、総人口が 2,700 名程度の非常に小さな村にあります。

この寺院は、ナーラーヤニー・デーヴィーが誕生して 14 歳まで暮らしたとされる場所を記念して建立されたというのは、先ほど言ったとおりです。この寺院も運営組織は公益法人化しております。2007 年に「ラードーバーイー・ナーラーヤニー慈善団体」が組織されました。この公益法人はマハーラーシュトラ州ヤヴァトマール在住の会社経営者であるムラーリーラール・ジュンジュヌーワラーを理事長とし、彼の息子が運営の中心になっております。彼らはトゥルシヤーン出身です。

この写真は建造中の寺院です。これを撮ったのが 2013 年ですので、今はもう完成しているところだと。次の写真が本殿で、その隣にあるのが宿坊。寺院を囲むように他の、例えば病院や学校を建設する予定だと。これが主神の写真です。一番中央にある小さな女の子が 14 歳までいたとされるナーラーヤニー・デーヴィー、その両隣にお父さんとお母さんが据えられています。

次に祭礼の写真です。彼が理事長で、当時の 11 月ごろ、彼とその家族が年に 1 回の祭礼にやって来ているものです。これも祭礼の 1 場面ですが、ステージを見ているのがドーカー・ハリヤー村の住人たち。この写真はナーラーヤニー・デーヴィーという少女が理事長の奥さんに乗り移った場面。乗り移った彼女を霊媒に、巡礼者たちが恩恵を得たいと、祝福をくれということをしている場面です。

この寺院の運営史を確認していきます。この寺院の興味深い点は、寺院運営において、村外のマールワーリーだけではなく、村人たちのイニシアティブが明確にみてとれる点です。こちらが、補足ですが、村人の中で寺院運営にかかわる中心人物のラメーシュ・チョードリーという人物です。2000 年ごろに、彼が音頭をとってドーカー・ハリヤー村がナーラーヤニー・デーヴィーの生誕地であるということを喧伝したと。その噂を聞きつけて、現理事長のムラーリーラールはその話に乗ったと。2002 年、彼の寄附によって基金がつけられ、2007 年には先の運営団体が設立されました。この年に初めて聖誕祭が実施されます。2013 年には寺院のおおよそが完成しました。

先ほど紹介した村の中心人物であるラメーシュ曰く、デーヴァサル村で寡婦殉死を行う 14 歳まで、ナーラーヤニー・デーヴィーはここの村で暮らしていたと。もちろん彼らの私的な調べです。彼女の義理の父親ジャーリーラームはジュンジュヌーに彼女の祠を建立したのですが、実の父親

(グルサハーヤマル)は生家があるドーカー・ハリヤー村に石板を建てて祠を作ったのだと。現在の寺院はその石板が掘り出された場所にあると。2000年からラーニー・サティーの生誕地としてこの村を喧伝すると、マハーラーシュトラ州のマルワリーが資金提供をして寺院購入に至ったと。

したがって、この寺院は、企画段階からマルワリーだけではなくて村人もコミットしているということで、運営方針が先のデーヴァサル村とは異なります。特にラメーシュをはじめ村人は、寺院運営にはカースト出自は制限されないと主張します。村人もマルワリーも問わず、女神に敬虔で十分な寄附金や十分な時間を提供できる者こそが受託者になれると。

一方で、ムラーリーラール率いるマルワリーの見解は、若干異なります。彼らはラメーシュをはじめとする村人のイニシアティブをあまり言及しません。むしろ、ラーニー・サティーに対して敬虔であった自分たちのある種の神的な経験から生誕地を発見したのだと。例えば、ムラーリーラールは彼女の夢を見て生誕地を見つけ出す使命を得て、20年かけて彼女の生家を発見して、私財を投じて寺院を建立したと、説明します。

2007年にトラストを設立し、本部は彼らの会社経営の拠点ヤヴァトマルにできました。マハーラーシュトラ州の税務当局に登録されてます。受託者数は7名で、会員のメンバーシップは、現在のところバンサル・ゴートラだけではなくて、他のカーストの資格もあるといいます。しかし、彼らは寺院が完成した後、細かいルールを決めるので、現状のルールが変わる可能性があるも含みを持たせています。恐らく将来的にはメンバーは、バンサル・ゴートラだけで占められる可能性があるのではないかと予想されます。

ではここで、地域社会における寺院の位置づけについて考えてみたいと思います。これは非常に難しいところでして、まずドーカー・ハリヤー村にはラメーシュを初め寺院管理にかかわる者が十数名程度しかいないという状況です。つまり2000名以上の他の村人にとって全く関係性がない、唐突に誕生した寺院ということです。例えば、慈善活動として寺院敷地内に病院や学校などが建設予定とありますが、それらがまだ目に見えない段階で、どれだけ村人にかかわりがあるのかというのが、全く見えてこない段階です。

また建設中の新たな寺院にはそぐわないほど、祭礼の規模が大きい点も指摘できます。これはジュンジュヌーのラーニー・サティー寺院から、大規模な祭礼や年中行事を模倣しているからだと思います。祭礼が大規模過ぎる場合、ラーニー・サティー女神を全く知らない村人にとっては、その熱狂さが逆に冷静さを喚起するというか、無関心になってしまうのではないかと。そのような懸念があるのです。例えば、先ほど紹介したように少女神が理事長の奥さんに憑依した場面では、理事長の親族は非常に熱狂的に恩恵をもらおうと集まっていますが、村人の一部から「そんなもの本当にあるわけないだろう」といったやじが出たのです。やじを飛ばした人はすぐに会場から連れ出されてしまいます。この祭礼の後、寺院関係者で村の青年部の代表は、「彼らはこれだけの恩恵をこの村に与えてくれたのだから、もっと積極的に祭礼に参加しよう。もっと一緒にこの祭礼を成功させるよう頑張ろう」と村人に注意喚起をしました。これは新たにできた寺院と村人との不安定な関係性をあらわす、象徴的な出来事だったと思います。

最後に、開かれた寺院運営の不透明さも懸念材料として挙げられます。先ほど紹介したように、



この寺院はあらゆる出自の人々が運営に参加できると言っています。現状ではある程度、開かれているとはいえ、今後、変更の可能性も示唆されてます。村の寺院関係者でさえ、祭礼の際の役割は副次的、従属的です。これらが今後どういうふうに変わっていくのかを見るためにも、今後とも継続的に調査していかないと考えております。

最後にまとめとして、ラーニー・サティー女神の分祀をいかに理解していけばいいのか考えてみたいと思います。女神の聖地が、各所に誕生する過程において、様々な意味での「恩恵」がその土地の人々の、時に利益になり、時に問題となっていくます。例えば多くの巡礼者が来ることによって、経済的な利益があるでしょうし、混乱もあるでしょう。また外で有名な女神であったとしても、その場所に住んでいる人にとって全く無関係であることも。というのも、ジュンジュヌーの寺院がすでに一大巡礼地として非常に有名であるため、その巡礼サーキットに加わったことによる作用が、いろんな意味で大きいのです。

また寺院運営のコミュニティ色の先鋭化という問題も指摘できます。寺院運営が組織化され、同族経営が徹底されることによって、他のコミュニティや、まさにその村に住んでいる人々が、どんどん寺院から乖離していくという状況が見てとれます。本来は、ジュンジュヌーのように、故郷のための慈善活動としてつくられたとされる寺院が、80年代以降の分祀例においては、まさに限定されたコミュニティのための寺院、もっといえば、マールワーリーがそこに帰るがための「故郷としての寺院」として、なっていっているのではないかと考えられます。

## まとめ

最後に、発表をまとめさせていただきます。

これまで寺院運営は、社会的名声や清廉なパブリックイメージの獲得への投資であったといわれています。故郷における女神寺院の建立というのは、故郷を発展させるがため、つまりは地域社会への慈善活動であったのです。しかし一方で、20世紀初頭からのカースト運動の影響があり、自分たちのコミュニティの起源に対する興味が高揚することによって、コミュニティの歴史が整理されていき、アンデンティティーの画一化が進んでいきます。そしてそのような族譜編纂に、寺院運営を組み込んでいくことによって、徐々に故郷／地域社会のために寺院運営するのではなく、自コミュニティのための寺院運営へとどうやらシフトしていったのではないかと考えられます。

この動向は、とりわけマールワーリーの特性と絡んでいるのではないのでしょうか。なぜなら、マールワーリーは、ラージャスターンという故郷への地域的な帰属性を強調しながらも、そこから離れて暮らすことを必然とします。ビジネスをするためにコルカタやムンバイ、さらには海外にいないければならないことをエクスキューズとしながら、ラージャスターンという地域的帰属性を強く維持することで、コミュニティのアイデンティティーが保たれるのです。それゆえマールワーリーにとって、寺院そのものが疑似故郷として機能していると考えられるのです。

ご清聴ありがとうございました。私からは以上です。

【田中鉄也氏の主要著書・論文】

“The State and the Transformation of Religion: Marwari Merchants and Hindu Temple Management”『東京外国語大学南アジア研究リサーチペーパー』No.4、2016年、1-33頁。

「現代インドにおける『公益の仕事』としてのヒンドゥー寺院運営－マールワリー商人にとってのラーニー・サティール寺院」『南アジア研究』第27号、2015年、46-69頁。

『インド人ビジネスマンとヒンドゥー寺院運営－マールワリーにとっての慈善・喜捨・実利』風響社、2014年。